

# 経 験 と 体 験

稲 葉 秀 賢

○  
経験と体験は一般には同意語として用いられるかも知れないが、語感から受けるものには、何か異ったものが感ぜられる。諸橋氏の漢和辞典に依ると、

経験は「みづから其物事を経歴実験する。又実際に試みて得た知識・技術」という義と、「感官から得た知覚、又、知覚によって結合せられた知識」と説明せられている。そして体験については、

「自身が直接現実を得た経験、又その経験を得心すること」と言い、体察に同じとある。そこで念の為に体察の項を見ると、「身を以て観察する。詳しく考察する」と註釈せられている。

これに依ると、経験といっても、体験といっても語義そのものには格別の差がないようにも見える。然し経験が感官から得た知覚、知覚によって結合せられた知識と説明せられるのに対し、体験は、現実を得た経験を観察すると言われるところに、語義の上からも異ったものが感ぜられる。即ち経験によって得るものは知識であり、体験によって得るものは智慧であるということが差別できないであろうか。それは語感から受ける恣意な理解であるかも知れないが、若しそれが許されるとするならば、その差異のうえにいろいろの問題が説明せられるのである。

例えば罪の問題である。罪の特質はそれが意識的であり、自覚的であるということである。それ故に多くの人が罪を犯したという経験はあっても、罪を犯したという体験を見失っていると言えないであらうか。ことさらに虫を殺すということは深い罪を犯すことである。然し虫を殺した経験を持つものは多いけれど、虫を殺したことに深い罪を自覚する体験を持つ人は少ない。私の母は、老年になってから蚊を殺さなかった。人はそれを愚かなんといつて笑うかも知れない。けれども、私の母にとって、蚊を殺すことは深い罪として感ぜられたに違いない。従って母は蚊を殺すことに深い罪の体験を持ったに對し、私は却って蚊を殺すことに快感をさえ覚えるのであるから、それが罪と教えられて蚊を殺す罪の経験はあっても、罪の体験はないのである。

周梨槃特はお掃除の体験をもったから、お掃除の経験を通してそこに深い智慧を得ることができた。私はお掃除の経験はあっても、それが体験にならぬから、何らの智慧をも得られないのである。宗教は経験によらずして、体験によらねば、その真実に到ることはできない。そして行住坐臥あらゆる経験が体験になるところに、仏道は開かれる。人生即道場といわれる所以である。

○

善導大師は『観經』の深心を積して

「深心と言うは即ち是れ深信の心也」

と積頭せられた。そして深信の相を二に開いて、機法二種の深信を説き給うた。「自身は現に是れ罪患生死の凡夫、曠劫より已來常に没し常に流転して出離之縁あることなし」ということは経験の問題でなく体験である。それ故にかくの如き深信の体験が深心、深い心とせられたのである。深い心は経験を通して体験に徹する心である。体験に徹することなしに曠劫已來の過去は感ぜられない。

現代人は徒らに経験を尊び、経験的知識に基づいてしか物を考えないから、曠劫已來という体験を否定しよ

うとする。最近『歎異鈔入門』を書いた著名な知識人は

「そこで彼にあるものは、私のばあいと同様に、この陽の照る地上の生だけであった。彼がはっきりと語っているのは、地上の生についてだけである。彼にとっては、ただ地上一度の生があるのみだ云々」

といっている。これは現代人の共感を呼ぶ断言であろう。現世のほかを信じないと著者は何度も宣言している。それがベストセラーになる所以であろうか。

然し果してそれでいいのであろうか。いい悪いということなしに、そこに善導大師が「深心というは即ち是れ深信の心也」といわれた意味を憶念せずにいらぬのである。たしかに前世も来世も経験の対象にはならぬであろう。然し現世の経験を通し、前世と来世が体験せられるのではないであろうか。それは有無という如き経験の問題ではない。経験せられるのは現世だけであるにしても、その経験を通して体験せられる過去として、曠劫流転の世界が体験せられるのではないか。それ故に、曠劫流転ということは経験ではなくて、「現に罪悪生死の凡夫」という経験を通して得られた体験である。宗祖が

「一切の群生海、無始より已来乃至今日今時に至るまで穢悪汚染にして清浄の心なく、虚仮譎偽にして真実の心無し」

といわれたのも、今日今時の経験を通して体験せられた無始已来の世界を表現せられたものであるに違いない。まことに深い心は体験に於いて明らかにせられるものである。

従って「出離之縁あることなし」という体験も、未来がある、来世があるということを云うのではない。現世の経験を通して体験せられた未来に外ならぬのである。宗祖が

「臨終一念の夕に大般涅槃を超証す」といわれたことも、横超の金剛心を窮める体験内容として自然のことでないであろうか。従って浄土は来世にない。現世が浄土と固執する必要はないはずである。それは自らの狭

小な経験への固執であり、体験の世界を見忘れたことにならぬであろうか。

○ 深信の他の面は法の深信と云われる。

「彼の阿弥陀仏の四十八願、衆生を摂受し給う。疑いなく慮りなく、彼の願力に乗じて定んで往生を得」ということも経験ではなく体験である。ジェームスの「宗教経験の種々相」を見てみると、そこには多くの宗教経験が書かれている。キリスト教に於けるこうした宗教経験は個別的であるが、その個別的な経験を通して、神の愛が体験せられている。従って個別的な宗教経験は心理学の問題としては貴重であるかも知れないが、寧ろそこで宗教的に重要なことは、その経験を通して体験せられた絶対の真実なのである。

真宗の妙好人にあっても、大悲の本願に遇う経験がいろいろな形で語られている。そしてそれらの経験は個別的であり、寧ろ一回的である。然しその個別的一回的な経験を通して、光明摂取の体験が得られるのである。阿弥陀仏の四十八願衆生を摂受し給うという体験は、最も深い心に於いて得られるものである。そしてその深い心が二種深信という相に於いて体験せられるのである。まことに信心獲得ということを経験でなくて体験でなければならぬ。信心の智慧という言葉はそれを如実に物語るのではないであろうか。

○ 『正信偈』曇鸞章に、宗祖は

「惑染の凡夫信心発すれば、生死即ち涅槃なりと証知せしむ」

と説いていられる。惑染の凡夫というは、「いかり、はらだち、そねみ、ねたむ心」、貪瞋の心に穢された衆生である。その衆生が生死即涅槃と証知する、それが信心の智慧だというのである。ここで問題とせられるのは証知という語であって、この証知に就いて『六要』には次の如き解釈が加えられている。

「問 生死即ち是れ涅槃の証は深悟の機に約す、惑染の凡夫縦い信心を發すとも、争てか其の証を得ん、隨て今の教には無相離念之義を明さず、煩惱菩提不二之悟何そ以て之に関らん。

答 凡夫直ちに此の理を証すと云うには非ず、今の名号は万徳の所歸仏果の功德なり、能信の信心又他力より起る。更に凡夫自力の心行に非ず、是の故に信を發して其の名号を稱すれば、不断煩惱の惡機為りと雖も、法の功能に依て此の理を備ふる也」

この六要主の解釈に依れば、能信の信心が他力であるから、不断煩惱のままに、証知の理を具するというのである。然るに生死即涅槃と証知することは、到底惑染の凡夫のなし得るところでないから、この証知は此士でなくて彼士でなければならぬとも説明せられている。これは如何に考えられるべきであろうか。ここにも經驗と體驗の問題がかくされているように見える。

思うに、われわれに經驗せられるのは惑染の凡夫としての生活である。いかり、はらだち、そねみ、ねたむ心は暫くも止むことはない。そこにわれわれの実際的な經驗がある。この經驗はだれでもが持つものであるけれども、その經驗を思惟し觀察して、生死即涅槃と體驗する人は少いのではないであろうか。まことに生死即涅槃ということは體驗であつて經驗ではない。そこに宗教生活の機微があるといわねばならない。

六要主が「信を發して其の名号を稱すれば不断煩惱の惡機為りと雖も、法の功能に依て此の理を備ふる也」といわれたのもこの意味であつて、信を發し名号を稱するところに、惑染の凡夫の經驗が転じて生死即涅槃の証知を成就するのである。従つてその証知が現益であるか当益であるかを決めようとするのは、宗教生活の體驗を無視するものであつて、「信を發して」其の名号を稱するところに、生死即涅槃と証知する體驗が成立するのである。従つて、涅槃を証知することは彼士であるから当益でなければならぬということは、証知の體驗を否定するのであり、また生死即涅槃と証知するのであるから、それは現益でなければならぬと固執するのも

証知の体験を経験化しようとするものである。生死即涅槃の証知を経験すれば、娑婆即寂光土となって、信を發し、その名号を称うる宗教生活の成立する場が失われるであろう。

まことに生死即涅槃と証知することは、体験の事実であって、経験の事実でないことを注意すべきである。人間の固執は経験をのみ重んじて、体験の事実を知らぬことから出ているように思われる。蓋し凡ゆる経験が単に経験に止って、それが内面化せられることがないからである。凡ゆる経験はそれが内面化せられて、そこに体験的な意味が見出されてこそ、経験に意味があるのである。失敗は成功の基ということがいわれる。それは失敗の経験が内面化せられる時である。凡ゆる経験に無駄がないという場合にも、それが内面化されて、そこに体験としての意味が見出されなければ、それは単なる強がりにしか過ぎぬであらう。信仰の事実にあつては、凡ゆる経験が法徳の縁に結びつく。ある妙好人は、一日一言とも云うべく、日々に胸にひびく声を聞くことなしには心が休まらなかったといわれる。そして隣人がお前の顔に墨がついているといわれた冗談を内面化して、わが心の姿を知らせて下さったといつて驚喜したという。ひとことの冗談も、それが内面化せられたとき、それは法悦の貴重な体験となるのである。

○

岩波哲学辞典によると「経験は、

一 事実特に實際の事実の義

二 非組織的事実の義

三 外界の印象の義

四 外的及び内的両界活動から生じた意識過程の義

五 現象と同義

## 六 直接の意識過程

### 七 認識若しくは認識の原子

等の諸義があるとし、この中、一・二は学的用語とするに足らず、五・六には同一事項を客観的主観的両方面から見るものに過ぎないから、暫く之を六に合すれば、三の外界印象、四の内外面界の印象、六直接意識過程、七認識の原子の四義となる。更に之を合併すれば、認識の材料としての経験及び認識の原子としての経験の二となる。」

と云っている。従って哲学的な規定に従っても、経験とは認識の材料、若しくは原子となるものを意味している。之に対し体験は、

「主客の未だ分れない、情意にみちた人格的経験である。乃至 経験と体験と如何に異なるかというに、経験を広い意義に用うれば、体験も経験の一種であるが、経験を客観的事物の認識という意義にすれば、体験は上に云った如き意味に於いて之と異なったものでなければならぬ」と説明せられている。かくて哲学的に云っても、経験と体験とは異なるものがあって、経験が客観的事実の認識に止るに對し、体験は情意に満ちた人格的経験であるといわれる如く、その意味は内面的である。たとえば知識が客観的事実の認識の上に成立するに對し、智慧といわれるものは内面的事実の認識に就いて云われるが如くである。従って経験は単なる経験に止らないで、それが体験として内面化されるところに、その意味が見出されるのである。

○

念仏という概念は広いけれども、浄土真宗にあっては、常に念仏は称名念仏である。然るにその称名念仏に就いて、

「称名憶念すれども無明由在て所願を満たざるものは何ん」

という疑問が持たれるのは、称名念仏の経験が体験化せられる時に、誰でもがつき当らねばならぬ疑問に外ならない。まことに称名念仏の経験を持つものは多い。文字も知らぬ幼児にも称名念仏の経験はある。然しその経験がそのままでは内面化せられるということがない。称名念仏の経験に於いて、徒らにその経験に固執するものは自力の念仏に終始し、徒らに能称の功を募るに到るであろう。而して能称の功を募らずにいらねぬ不安の中に、さきの問が提出せられる時、始めて念仏は内面化せられて、称名念仏がただ称えることでなく、却て「如来は是実相身、是為物身と知り」、又淳一相統の心を以て称える信心の体験に深化せられるのである。それ故に念仏の経験は必ず信心として体験せられねばならぬのであって、そこに念仏の伝統がある。

竜樹は、既に、「若し人善根を種へて疑へば則ち華開けず、信心清浄なれば華開いて則ち仏を見奉る」といって、称名易行の体験が信心ひとつにあることを明らかにしている。天親はまた第十八願意に立つて、「三信(信心)十念(念仏)を一心五念と開き、念仏の体験が一心帰命の安心に極まることを『浄土論』の上に極め、その天親の精神を最も顕著に開顯したのが曇鸞であった。「如実修行相應は信心ひとつにさだめたり」と宗祖が嘆ぜられた如く、一論の極意を明らかにしたのは曇鸞の『論註』に示された体験の領解に基づくといわねばならぬ。まことに、「天親菩薩のみことをも、鸞師とよきのべたまはずば、他力広大威徳の、心行いかでかさたらまし」と嘆ぜられる所以である。而して曇鸞の三不三信の誨むしえを受けて、浄土一門可通入路の念仏道を明らかにしたのが道綽であり、「一心に弥陀の名号を念じて行住坐臥時節の久近を問わず、念々に捨てざればこれを正定之業と名づく」といって、ひとえに念仏往生を説いた善導も、その念仏が正定業である所以は、それが、「彼の仏願に順ずる故」であることを注意し、従って弥陀は光明名号を以て十方を攝化し給うが故に、但だ信心を以て求念すべきことを明らかにしたのである。ここにも念仏が信心を以て体験せられるべきことが明らかにせられている。日本に来て浄土教の先駆者である源信は、専雑二修の得失に注意して報化二土を弁立したのであるが、



殊に專雜の得失に注意したことは、そこに念仏が信心として体験せられていたからである。それ故に日本に於いて浄土宗の独立を宣言した元祖法然は、往生之業念仏為本と標榜しながら、二行章では称名正定業の所以を問うて、称名念仏が本願の行たることに注意し、「故に之を修する者（念仏する者）は仏願に乗じて必ず往生を得るなり」と説いて、念仏が正定業である所以を仏願を信ずる信心の体験に求めている。そして三心章を開いて、「念仏の行者必ず三心を具すべし」と云い、「生死の家には疑を以て所止となし、涅槃の城には信を以て能入となす」と宣言している。まことに念仏はただ信心を以て体験せられるべきである。このことを明らかにせられたところに、宗祖の『教行信証』に於ける信別開の意義があったのである。「涅槃の真因は唯信心を以てす」という宣言は、信心の体験を最も鮮明にせられたものと云わねばならぬ。

○

かくの如く経験と体験の関係は、いろいろの意味を明らかにするものであって、それが解学行学の関係にも、又聖教読みの聖教知らずという言葉にもそのまま適用せられるのである。蓋し解学が行学を伴わねば、それは単なる知識であり、宗教体験を形成せぬであろう。行学という体験を通して解学の知識が重要な意味を持つのである。従って、聖教読みの聖教知らずということも、聖教の知識はあっても、それが体験化されなければ、そのままにこの言葉があてはまるのである。まことにわれわれの戒慎すべきことではないであらうか。